

それに反してオイジブースは、彼が自らの運命を、自らの破滅を賭しても明白にしようとするのは、国民のため、真理のためなのです。この場合の真理は、政治的契機とはつきりと結びついてゐる。それ故にこそオイジブースは英雄なのです。オイジブースの倫理的矛盾は、ライオス王とイオカステとの誤つた倫理にある。彼等はたとひ予言のためとはいへ、自分の子を殺さうとしたのです。だからオイジブースが云ふ所がある。「母だのに子供をすて、殺さうとしたのか」と。またオイジブースがライオスを殺したのは、やはりライオスが暴君であつたからです。オイジブースは正当防衛であつた。更にオイジブースが王になつたのは、国民をスフィンクスの害から救つたからです。オイジブースは自分についての予言をさけるために、形式上、コリントの王子でありながら、自らコリントを去つて、漂浪の旅に出たやうな人です。そして乱暴なライオス王が、衆と権威とをたのんで彼に無礼をした時、オイジブースは正当防衛で相手を撃退した勇者であり、更にスフィンクスの謎をといた智者であつて、すべての点で王者なのです。しかも国民の不幸を救はんがため、且つは真実のためには、自分を破滅させることも辞さない。また自ら怖るべき運命に破滅しても、イオカステのやうに自殺などしない。眼玉をつぶす。あの眼をつぶすところは、実は余りにも悲壯で、ぼくもすつかり参つて了つたくらいです。彼がクレオンと云ひあふ所なども、あの頑固さすらも、彼の資質の偉大の証拠になつてゐる。何故なら彼は自らのあやまりをただすのに、寸豪センチマンもためらはない。このあたりは「トラキスの女達」のヘラクレスにもあらはれてゐる。

とにかくオイジブースは偉大な形象です。プロメテウスに迫るものがある。プロメテウスよりは問題が入り込んでゐて、例へばあなたのように、充分オイジブースの偉大さをとらへ得ない怖れを免れないが、プロメテウスは誰も理解しそこなふことがないほど、はつきりしてゐる強力なテーマです。しかもプロメテウスはアイスキロスによつて、すつかりあんな風に偉大に「創作」されたのです。イオーの形象を伴ひつつ。プロメテウスでは政治と個人倫理とが完全に統一されてゐます。オイジブースも、政治と個人倫理の統一の点ではアンチゴネーより上です。問題の大きさでも形象の偉大さでも。

エレクトラについても、あなたの政治批判力の弱さが、エレクトラの全体の理解に到らせてゐないやうに見受ける。尤もエレクトラ劇は、アイスキロスの方が僕は立派だと思ふ。アイスキロスの「アガメンノン」を読むと、エレクトラの倫理がよくわかる。即ちアガメンノンとアイギストスとの、この二つの王者の形象に於ては、アガメンノンの方が偉いのです。アガメンノンはイリアッドの中では、古い型の王として、アキレスのモラルによつて否定されてゐる。だが

「アイアス」(ソフォクレス)の中では、アイアスの方がアガメンノンより劣つてゐるし、オレステス劇では、アガメンノンは明かにアイギストスよりも、よりよき王者なのです。それはちよつとリア王とイヤゴの対比、ハムレットの中の亡王と新王との対比を考へさせる。アイギストスはイヤゴ式の陰險な謀略を以て、凱旋王であるアガメンノンをたふした。だからアイスキロスの「アガメンノン」にはつきり出てゐるやうに、アルゴスの市民はアガメンノンの支持者であり、アイギストスを専制者(野心的)として反対してゐるのです。

アガメンノンが自分の娘を犠牲にしたことは、現在の倫理から明かに大変悪いが、そして当時としても、個人の立場からたとへばクリュタイメネストラのやうな批評が可能であつたが、しかも歴史的に云つて、一がいに批難出来ないのです。何故ならイフゲーニーの犠牲は、アガメンノンにとつて、政治的目的(遠征軍を救ふ)の為に自分の個人的利害を犠牲にしたことであつて、いはば「政治」と云ふものの本来的な非人間性を示すもので、当時のモラルとしては承認されるのです(承認されるとはいへ娘を犠牲にすると云ふ風な政治の非人間性は、結局クリュタイメネストラの恨みとなり、アガメンノン自身が否定されることになる)。要するにアガメンノンの形象は、古い型の王者(アキレスやオディッシウス、オイデプスなどと比べて)ではあるが、アイギストスの形象よりは大きいのです。それ故にこそ、エレクトラやオレステスの正義がはつきりしてくるのです。エレクトラやオレステスの背後には、これもアイスキロスの場合に特にはつきり出てゐるが、アルゴスの市民、民衆が支持してゐるのです。すなはち政治的方向と個人的契機とが、やはり統一されてゐます。

クリュタイメネストラの言葉がたしかに真理を含んでゐるのに、アイスキロスやソフォクレスによつてあんなにはつきりと否定されねばならなかつたのは、上の理由からわかるが、もう一つ、ソフォクレスで感じることは、アイギストスとクリュタイメネストラとの結合が、本当の自然的倫理をもたないと云ふことです。クリュタイメネストラのアガメンノン批判は、政治的契機をぬきにして云へば同情さるべきです、その点アンチゴネーへの同情と本質的に大差なく。しかるにアンチゴネーの欲求は、たとひ政治的批判は欠除してゐても、純粹で自然の理に沿つてゐるが、クリュタイメネストラの言葉は、自分の政治的にも倫理的にもあやまつた行動の口実になつてゐるにすぎない。彼女のアガメンノンへのうらみが真情なら、アイギストスへの愛情は偽善であり、彼女のアイギストスへの愛情が真実なら、アガメンノンへの恨みは口実である。そしてこの二つともが、アルゴスの市民の希望に反してなされる。かくて彼女は否定されねばならなかつた。

またアイスキロスのオレステス劇で大切なことは、クリュタイメネストラとエウメニデスとが、古い時代の倫理（母系時代）の代表者として出てゐるのに対して、オレステス、エレクトラ、アポロ、アテネが新しい時代の倫理（父系時代）の代表者としてあらはれてゐることです。そして女としては古い時代、母系時代のモラルにより多き同情を感じるでせうが、歴史的には、やはり古いモラルとして否定されねばなかつたのです。かう云ふことの批判、理解は、歴史と政治との勉強なしには達し得ない。アイスキロスがソフォクレスより偉大な点は、前の手紙でも書いたやうに、いつでも政治的契機と個人的契機との統一があつて、新しいモラルと古いモラルとの斗争をはつきりと、民族的な雄大さで描いてゐる点だと思ひます。ソフォクレスの方は人間の個別的形像の面ですぐれてゐる。

プランティション第七節の批評をありがたう。だが、もう一辺第七節を読んでみてくれませんか。実は僕が全篇で一番力を入れたのは、苦心したのは、緒論とあの第二章第七節となんです。出来栄えの一番心配なのも実はその二つで、第一の方はどうも残念ながら失敗でしたが、今や第二の方も失敗かと判定されんとしてゐるので、中々重大なんです。第七節、あのニューデイルとプランティション問題との展開でこそ、僕の「歴史」が最も緊張し、あそこを読んでくれる人に云ひたいところなんです。僕の歴史的情熱の一番こもつた所が「力ぬけてゐる」としたら、大いに考へねばならないから。

あそこで僕は政治と云ふもの、歴史と云ふものを、力一ぱいに展開してみました。ニューデイルの諸政策の歴史的本質も示しながら。政治と現実、歴史と政治、これのダイアレクティク。もう一度僕も読んでみますから、あなたもよんで厳格に批判して下さい。数字はああ云ふ所では中々ないのです。統計と云ふものは、あんな風な歴史的運動をあらはすやうには中々つくられない。だから、せい一ぱいさがして集めた数字なんです。

僕がここは力入れた所だから、そのつもりで読んでくれと云ふわけではない。そのつもりで同情して読んでくれと云ふのではない。ここが力を入れたところだから、そしてその力が読みとられなかつたから、もう一度読んでやつぱり力がないかどうか、もう一度判定してほしいと云ふのです。気を悪くしないやうに。第四節、五節、六節のやうに個別を叙述し、分析的に書けるところはどちらかと云ふと書きやすい。だが第七節のやうに、政治理解と、歴史的運動の総合的展開とを必要とするところは、たしかに一番困難で、失敗しやすいところす。それだけに僕には重大な、力をうちこんだところです。

何だか今日はあなたの意見の弁駁ばかりになつて了ひましたが、これに活潑に駁論して下さい。ただ、この手紙で書い

た問題に関する限り、あなたが政治と歴史との理解に、まだ若いと云ふことは云へるのかも知れない。けれど政治と歴史との理解は、やはり極めて重大ですから、僕の意見の矛盾をみつめて、自分の考へで大いに弁駁して下さい。僕も待つてゐます。

では今日は意地悪いくらいに理くつつばいばかりで、余り香しい手紙ではないが、これだけで出させよう。

幸子から謙一あて（一九四四年一月二九〜三〇日の記、一月一日の消印）

十一月廿九日晴

すばらしい上々の天気です。今日も又東京はあぶないかも知れませんね。お天気のおんまりいいのも有難くないこと。午後、廿六日附と廿七日朝の二通受とりました。第一回空襲の精しい様子解つて安心致しました。安心とは云ふものゝ、まだく、廿七日のもわかつてゐないし、唯、帝都空襲が新聞の報導（通）の様にそれ程の盲爆でない様子なので、多少安心と云ふ程度です。

今日はどうも身体具合わるく、吐気があつて、食事が進みません。これは廿日頃始まる筈のが未だなので、或はと思つて居りますけれど。なにしろ十日もおくれた事は今までありませんでした。

十一月廿日

昨夜十二時頃、天竜社のサイレンで目をさましました。サイレンが鳴つても東京で聞いた程の感じはうけません、東京空襲だらうと思ふと矢張り不安でなりません。四時半ころにもう一度鳴つて、やや安心しましたが、七時のラジオで数時間に渡る波状爆撃をやつたとのこと、本当に心配です。

廿四日の空襲の話も今ごろになつて、チヨクく、あちから来た人から伝られます。何処まで本当かわかりませんが、川崎がひどかつたとか、手足のとんでゐるのを集めて何台ものトラックが行つたとか、又荏原方面がひどかつたと云ふ人もあるし、品川、大森が一番被害あつたと云ふ人もあります。何れにしても発表よりは被害あつたものと思ふ他はありません。稲ちやんからは葉書で無事ですだから安心して下さい、と云ふ至極かん単な便りがありました。

本は無事買ったのですね。お金は何処から調達出来ました？ 森井さんとのお話は大変面白くよみました。白田さんの

恋人、寿岳文章の息子なんですつて。寿岳文章つて、ほんやく家でせう。お母さんか姉さんもほん訳するのでせう。たしか、ハドソンのほるかなる国、遠い昔、と云ふのが寿岳しづ子とか云つた様に思ひます。どうして臼田さんは自分の恋愛を、あなたに一笑に附されるなんて思つてゐたのでせう。あなたの事を深刻な恋愛でもした位に思つてゐたからでせうか。

それはさうと森井さんとの対話、ことに後半は面白い。森井さんの現段階が、あの対話である程度表現されてゐますね。本当に、まつてゐる、受身である事は誠実ではありませぬ。まつてゐる——と云ふ事は本当は無理なんですから。かうありたいと願ひ乍らまつ——(即ちまつ、時機とか云ふ觀念は他力本願です)のは卑怯だし、相手にも自分に対しても利己的なのです。凡ては行動を起す事によつて、解決への道も開かれてゆくのですもの。ましてや友情とか恋愛の場合には、自分が積極的に道を開いてゆくのがやなくつちや、発展はないのですもの。特に女の場合は、そんな事は男の方から云ひ出すもので、女が云ひ出すのは恥かしい事だと云ふ、昔から西洋にもあつた考へ方が残つてゐるのでせう。結局責任回避的などころがありますね。私が云ひ出したのぢやないから、私が進んだのぢやないから、私の責任ぢやないつてところがあるのね。相手の云ひ出してくる時機をまつと云ふ気持ちの中には矢張り、二人の間に対等の人間関係の欠けてゐる事を示してゐるようなところがあると思ひます。其の中には矢張り女と云ふ事にこだはりすぎるものもある。女らしくないと云ふ事を嫌ふき持もまざつてゐる。今までの女らしいと云ふ事、その概念を調べると、そこにあるものは中世的な封建的な隷属関係から生れ出たものばかりで、人間的なものは一ツもありません。又時機をまつてゐる、相手の発言で自分も感情を恋愛的に高めようとする気持は、本当のものぢやない。叩かれてから鳴るのぢやなくつて、自分の方から鳴る——何と云ふのでせうか、いはゆる共鳴ぢやなくつちやいけなと思ふんだけれど。

「無意識的で美しい行動、正しい行動、幸福な生活」と、森井さんは仰言る。それは「子供は何も知らないで無邪気だから美しい」と云つて、そこに価値を認める人と同じ事を云つてゐるようね。私は無意識の起す価値はみとめない方の側だわ。あなたの云ふ通り、意識してやることこそ、人間的正しさだと思ふ方よ。意識しない正しさは、あなたの云ふ通り持続するものではないのです。

アンネットの感想も同感です。とくに私はアンネットのマルクに対する態度の中にそれをみます。それはさうと、アンネットの事や伊藤さんの話、宮川さんの話を書いてある廿七日朝附の手紙は解封したと見え、私のところに届いた時は、とぢめの糊がまだ濡れて、ニチャ／＼してゐました。糊のかわかぬ中に届いてしまつたらしい。

昨日から風と共にをもう一度読み返しました。今度は面白くよみました。と云ふのは再建頃の南部を、南部びいきが南部側から書いてゐるのですから、K・K・Kの起つて来るところ、解放奴隷へのアトランタの町の人々の悪口の中に彼等の恐怖がまぎ／＼と出てゐるからです。トニー・フォンテーヌと云ふタラのプランターの息子が、解放局の仕事についてゐるウヰルカースンを殺して逃げて来るところ、僕はくろん坊をにくむ様になるなんて意外千万だ。くろん坊も又、全くしよ^④うのない奴等で、あの悪党の云ふ事なら信用しやがつて、僕等が昔、彼等のためにしてやつた事を忘れてゐる。若し彼等が黒人に投票権を与へたら我々はどうか、万事休すですよ。もう一度戦争にならうとどうあらうと、僕等は何かの対策を講じなければならぬ。さもなければ、やがて此の地方には黒人坊の判事やくろん坊の議員が生れる!

当時南部の男達(と云ふのはスカレットのまはりの)の顔にあらはれた何か異つたもの、彼女を元氣^③ずかせる様なあるもの、同時に恐怖すら感じさせるようなあるもの――言葉で云ひあらはせぬ憤怒、何ものも止められぬ決意を見た。――と書いてゐる。プランターたちの死もの狂ひの再建防害をそこに見る。K・K・Kの恐怖を。奴隷制度にうちかはれて来た残ぎやく性の発作を。それからタラの土地に高^⑤の税金がかかつて来るところで、再建政府のプランターの土地没収策を見られるし、ジョージア辺で軍隊の力を持つて再建政府が南部の旧制度を一し^⑥うしようとしてゐるあたりを見、ここまでやり乍ら、もう一息出来なかつたのが甚だ残念に思はれました。

かつての奴隷たちは万有の王者となつた。ヤンキーの後押しのおかげで、一番下等で一番無知な連中が先頭だ。彼等の中でも分別のある連中は、自由を軽蔑し乍ら、白人の主人たちと同じ位苦しんでゐた。奴隷の中でも一番上等の階級に属する家働きの黒人たちは、矢張り白人と一緒にゐる。ほとんど凡ての紛争の原因を作り出してゐる「解放された無頼の黒人共」はおほむね野良働きの奴隷であつた。奴隷制時代にはさうした下等な黒人坊は働きのないやくざ者として、家働きの黒人や庭働きの黒人たちからも軽蔑されてゐた。今では此の階級―黒人社会でも一番下等な階級が、南部の生活を惨憺たる方向に引きづりつつあつた。

南部再建が白人によつて作られて来た黒人の社会の階級の対立や、無知にされて来たため、今解放されても自力で考へられぬ人々によつても破壊されてゆくさま、再建に便乗して南部をあらゆる三百代言投機商人の跳梁、K・K・Kの地下運動等、まぎ／＼と描き出されて、今まで批評家の云つた、

南部のプランター側に立ち、深い愛惜の情をもつて、アメリカの「旧制度」を描き、南方人の痛苦と憤激をもつて描

いてゐる事は、奴隸制度の廃止はもとより至当であらうが、吾々には南北戦争を通常勝つた北部側からのみでに学び、南部諸州の声を知らなかつた」

小泉信三

「南北戦争について、従来北方の声ばかり。君の訳によつて南部の立場から描かれた南北戦争の声をきいて、宣伝はつづく必要だと思つた」

生方敏郎

の様な南部ヨーゴの気持を持たせられる正に逆に、マナサスなどで表現出来得なかつた「破壊されるべき南部の眞実」を、南部人自ら思はず告白せざるを得なかつたののだの感じを得ました。

さつとすじにつられてよめば、南部情緒に浸されて、昔の南部、牧歌的、ロマンティックな美しい側の南部にばかり目を注いで、もう一つの側の南部は知らずに通る。あの小説の唯一のインテリ、考へる人である南部の典形紳士アシユレ・ウエルクスでさへ、何処かで次のような事を云ふ。

「僕は卑怯だつた。現実を直視する事は出来ない。夢の中に逃げこんでばかりゐるのです。いはば天罰です。裸の現実を見たがらなかつたと云ふのは。僕は物事をはつきりさせる事は好まなかつた。何でもあいまいに影にしてばかりおきたかつた。戦争の前までは人生は美しかつた。目のくらむ様な美しさがあつた。しかし、これは此のごろ判つたのだけれど、人生は誰にとつても美しかつた訳ではない」。

で、アシユレはここで立ちどまつてしまふ。先へゆけないのです。先へふみ出さうと思はないのです。他のプランターのように、失はれる世界を失ふまいと云ふ、まちがつた努力もしなければ、先へもふみ出す勇氣もなく、現実から逃げだしたいと云ふのです。アシユレを先頭に、どの描かれて登場するプランター、その家族も、新しい正しい発足をする者はゐなかつた。理想化された女性メラニーも、アシユレよりはましだけれど、彼女もはつきりした考へも持てないし、善良さは唯彼女のキリスト教的博愛にあつた丈です。風と共にをよんで、人の云ふ様に南部に有利な宣伝と云ふ感じはなく、南部人によつて示された南部の不利をまさしくと感じました。そして階級間の憎悪の激しさにおどろきました。南部のプリア・ホワイトの一人が描かれてゐて、再建当時にオハラ家との対立、憎悪、復讐と云ふ形で出て来ます。スラッタリイと云ふプリアホワイトは、土地を得たし浮び上つたが、トニー・フォンテーヌと云ふプランターに殺るされてしまひます。

それにしても風と共にの映画はどの程度に出来たでせうね。見度かつたと思ひます。

謙一から幸子あて（一九四四年一月三〇日の記）

十一月三十日（木）雨

昨夜半から今朝へかけての、恐らく今までに一番猛烈に思われた空襲にも、僕は無事。いねちゃんも無事でせう。今朝、女子アパートへ電話をかけてたしかめました。日本橋の三越前から神田駅の方へかけてひどくやられたさうで、本室の裏の水道局のどこかへも焼夷弾がおちて、本室の宿直者が一緒に消しとめたさうです。

昨夕方、あなたへNo.30の手紙を渋谷駅で投函して、早川君の所へ訪ねました。小田急がひどく混んで、おまけに車内の電灯が消えたままで、買ひ出しの荷物をふまれたとかふまれないとか、「何云つてやんでい。そんな荷物おいとくのが悪いんよ。こんなに混んでるぢやねえか。おまけにこの電車、ヤミ電車でやがらあ」でみんなどつと笑ふと、こちらの方から「今夜はお月夜だよ。見ろよ、満月だい」「何を。電車の中はヤミぢやねえか」などとさわいでゐたものですが、本当にいい月夜で、こんな夜空襲に来るかも知れないなと思ひながら自由ヶ丘へ行つたものです。今日はお天気で始めて来なかつたので（廿八日は警報はならなかつたが、二機偵察に来たさうです）、どことなく気分がのんきでした。早川君の家では、奥さんが子供をつれて少し前からくに帰つてゐて一人でゐました。例によつて大おしやべりをして、九時半頃駅まで送られて帰りました。経堂へ帰つたのが十時半。月は雲にかくれてゐましたが明るい夜でした。それからあなたの手紙のことを思ひ、「プランティション」の第七節を一わたり読んでみて、どこが力ぬけしてゐるかを調べましたが、大いに眠いので十一時少しすぎに眠りました。そしたら夜半にサイレンが猛烈になるのです。

空襲サイレンだとすぐわかりました。雨の音がしてゐます。飛行機の爆音はきこえません。寒いし暗いし眠いしで、そのまま床の中にあると、やがてドカン／＼と云ふ風な地びきを伴つた爆発音が、たてつづけに十回もしたでせうか。どこだらうかと窓をあけて見まわすと、やや北寄りに東の方、丁度渋谷か青山の方の空が凄くまっ赤に燃えてゐるらしいのが、すぐ見えました。これはすごいぞと暫く見てゐましたが、寒いのでまた床の中には入る、すると今度は南の方角から、同じやうに爆弾の音が十回ばかりたてつづけにひびいて、ガラス戸がゆれました。やはり飛行機の音がしない。その中余り眠くてまた眠つて了つたらしい。空襲解除のサイレンで目をさまして、時計を見るとまだ五時前でした。ラジオでは「敵機南方へ退散」と云ひ、間もなく警戒警報も解除になりました。

僕は眠いのもう一寐入りして、七時少し前に起きました。コンロをもつて下へ下りて行くと、「菊池さん、昨夜はズい分お起ししたんですよ。お帰りは何時でした?」「十時半ごろでしたよ」「ああ、それぢや、丁度寐入りばなだつたんですね。十一時半ごろでしたからね、警戒警報が出たのは」「え、十一時半? 四時頃ぢやなかつたんですか?」「どういたしまして。十一時半ですよ。四時のは二度目だつたんですよ。最初の空襲は十二時前から三時頃まで続いて怖しかったんですよ。菊池さん菊池さんて、ずい分大きい声でお呼びして戸を叩いたんですが、お返事ないでせう。もう防空壕へおは入りになったかとも思つて、一たん下へおりましたですが、また怖しい音でせう。ラジオが『爆弾や焼夷弾をばらまいてゐます』つて云ふんでせう。堪らなくなつてまた二階へ上つてお呼びしたんですよ。一色さん(一色一家は一昨日から帰つてゐました)の奥さんは大さわぎして防空壕へかけこむし、雨はふり出すし、本当にどうしたもんかと思ひましたよ。ラジオがだんく怖しいことを云ふし、バク弾の音はするし、東の空は赤いんでせう。仕方がないから、下でふとんの中にもぐつてゐましたよ。でもずい分よくおやすみだつたんですね」「いやあ、どうも。四時頃のは眼がさめたんですが、どうにも処置なしだと思つて、そのまま寐てゐましたよ。そんなに凄かつたんですか?」「凄かつたですとも。どこがやられたのでせうね。一色さんの奥さんのさわぎやうたらないんですよ。どうしませう」と云つて、うろくしながらさわぐのでせう。一色さんぢやさわぐにきまつてゐると思つたもんですから、警戒警報ではお知らせしなかつたんですよ。お気づきにもならなかつたらしいですよ。空襲ケイホウが出たからお起したら、あんのじよう大さわぎでせう。いやになつて了ひましたよ。そして今朝早く、もう御殿場へお帰りになつて了ひましたよ」「へーえ。早いですね。そんなさわぎだつたんですか。ちつとも知らなかつたなあ。もうぢき電話できいてみませう、どこへ落ちたか」。

コンロだけ起して、外食券で近処の食堂へ朝食をたべに行きますと、二、三人食べながら話してゐました。「凄かつたね。おばさん。おれんちなんかゆれたぜ」「あたしや始めのサイレン知らずに寐ちやつてたんだよ。ひよいと眼をさますと、とうさんが窓をあげながら何時ごろだろな、つてんだらう。何だねえ、電気つけてみれやいいぢやないかつて云つてやつたらさ、何てやんでい、空襲警報出てんだぞう、てんでせう。あたしやたまげたねえ」「おれ、起きてたけど、寒いんだらう。眠つちやつたよ」「あたしもはじめ防空壕へは入つたけど、雨で下からしめつてくるし、やになつて部屋へ帰つてふとんかぶつてじつとしてたよ。どこへ落ちたんだらうね」「あつちの方、すぐく赤かつたね。火柱立つたよ。凄かつたなあ」「かなわんなあ。夜なんか来られぢやなあ。毎晩来られぢや身体がたまんねえや。おばさん、おれ

におつけおかはりくんな。ガラ／＼とは入つて来た十五、六の少年が「こわかつたな^(註)あ。日本橋と芝とやられたつてよ。はじめの、日本橋だつてな」と云つたので、こりや大分深刻らしいと思つて、食べ終るとすぐ帰つて、本室へ電話してみました。電話は通じて杉本老人(會計)らしい声なので、「モシ／＼こちら経堂分室ですよ。日本橋やられたつてきいたんですが無事ですか」「ああどうも。こちらはおかげで助かりましたよ。三越の前の通りから神田へかけて焼けてゐますよ。ここちや裏の水道局の中へ一ぱつ焼夷彈落ちて、あたしたち四人も手伝つて消しましたよ。四人宿直したんですよ。あたしや杉本だが、あなた菊池さんですね。どうもひどいことでしたな。おかげさまで無事でよかつたですな。上北沢も無事でした。これから理事長へ報告するところです」「ぢやよろしく」。

それから大塚の女子アパートへかけて無事と知りました。谷川君を最初に白田君以外の全員出て来て、しきりと空襲ばなしです。僕は手紙。雨がふつて寒くブルーズをきてゐます。コンロに足をあぶりながら。今、廿八日のお手紙受取りました。

ブランドスは歴史の洞察と云ふ点では大したことないのだと思ひます。テーヌでもブランドスでも、歴史はよく知つてゐるが、歴史の原動力、歴史の主体を明確につかんでゐないのです。だから洞察がない。バルザックの「カトリヌ」の方が余ほどすぐれてゐると思ふ。あなたがブランドスのノートを読み返して失望したのは、ノートのとり方にも欠陥あつたかも知れないけれど、あなたの理解力が進んだことのあらはれだと思ひます。とにかく今あなたの方にも欠陥現実理解力は、本当に洞察のある著者かどうかを相当よく見分けられるにちがひない。少し前のあなたは、自分の知らぬことや自分と同じ意見などが出てくると、それだけでいはば喜んでしまつて感激もしたかも知れない。だがもう、そんなプリミティブな理解では満足出来ないまでに成長してゐるのです。だが歴史洞察力は、歴史的现实をより広くより深く学ぶことによつて、不断にきたはれて行かねばならない。その意味で、事実をひろく書いたもの、例へばブランドスやテーヌなどもいいと思ひます。アキイラの戦ひはお説のやうに大したものではないでせう。

さて「ブランドション」の第七節ですが、読みなほしてくれましたか。あそこで僕はニューデイルの本質を描き出したのです。それは誰もやつてゐないのです。恐慌の進展、国民の不満、金融資本の狼狽と反動化、その中間のニューデイル、これをブランドション的南部を中心に、歴史的運動に於て描き出し、ニューデイルが国内政治の波動、金権主義と国民との力と力との対立抗争の断面からあらはれて来、その急進化と後退とは、国民の圧力の増進と減衰との交替を反映する、さう云ふ現代史の断面を展開してみせたのです。そして僕の歴史叙述の将来の方向は、かうした

ところにあるのです。南北戦争の原稿（独立戦争まで）もその歴史叙述の一つの試みです。歴史を歴史的運動の波のまに再現すること、しかも歴史現象の再現に常にその歴史的主体、歴史本質、歴史推進力の内面的脈絡をつかみ出し把握しつづつ。これが第七節の全体で試みられてゐるのです。かう云ふ歴史叙述は、個別的現実から一定の距離をとらないといけない。個別的現実でなくて、それらを一つの大きい歴史の運動としてつかむのですから。それが力ぬけ、冷淡ととられたかも知れない。歴史的叙述は歴史的現実を冷厳に示さねばならない。そこで主観的感情を出すと、昔よくあつたやうな歴史になるのです。

こちらで僕の「プランテーション」の全体を通じて、問題のあるところ、僕の歴史論の主張を含めてゐるところ、僕のオリヂナリティとして自負するところを説明しておきませう。緒論では、先づ「プランテーション」の定義(一)(二)（資本経営と云ふことと前資本制的労働と云ふこと、そして後者に全問題があると云ふこと）は僕の独創です。註4を見て下さい。そしてこの定義から、全論旨が展開されるのです。この基礎概念も、僕が簡単につかんだものでなく、昭和十七年から昨年秋まで、一年半あれこれと考へて、あそこまで達したのです。次に、かかるものとしてのプランテーションが資本の歴史といかに結ばれてゐるか云ふことの素描も、僕独自のものです。アメリカ史とプランテーションとの関係(四)は、僕が今度全面的に書かうと思つてゐる最もオリヂナルなところでは、これは前にもしばしば云つたとほり。独立戦争とプランテーションのあたりなんかは特にさうです。プランテーションを前期奴隷制、後期奴隷制、クロッパ制の三段階に分け、前期奴隷制を更に十七世紀と十八世紀（白人年期奴隷制と黒人奴隷制）とに分つたのも重要なことです。殊にアメリカのプランテーション制が、アメリカの帝国主義化と聯関することの問題提起も重大です。(五)も、人種的偏見が奴隷制に起因することの指適^種は注目されていい苦です。(六)は簡単な素描で、之は他に誰もやつてゐませんが、特に自負するほどのことではない。ただポピュリズム運動とターナーの「フロンティア」と、そして南部問題とをむすびつけたあたりは注目されていいでせう。(七)は、之も無論誰もやつてゐないし、興味のあることだから、その意味でも関心をもたれていいが、ここでローズヴェルト及びニューディールの本質の問題提起があるので重大です。そしてこの(七)がより全面的に第二章第七節で展開されるのです。

要するにこの緒論は、全体にわたつて問題提起にみちて居り、どこにも僕のオリヂナルな思索があつて、借り物は全然ないと云つていいのです。註を見て下さつても、そのことはわかるでせう。そんな風なので、僕がこれに力を入れたいかを御察し下さい。しかるに気負ひすぎて、もつとわかりやすく書けたのに、こんな重たいものにしたのは本当に残

念なんです。

第一章は概観ですから、(一)の地域対立の歴史的素描だけが力の入れどころで、あとは数字が主です。数字では殺人件数を出したことが、職業構成をうきぼりにしたことぐらいが目ざれるところでせう。

第二章第一節は、アメリカの農業をこんな風に書いたものは他にないでせうが、これは本論全体とそんなに重要な関係にないので、やや冗長すぎたと思つてゐます。こんな風なアメリカ農業の歴史的展望は、僕は面白いと思つてやつたが、経済学者からは文句が出るかも知れない。ここで幾分よりどころにしたものは実はソヴィエトの論文です。尤もそのよりどころと云ふのは、アメリカ農業の海外市場依存と国内市場依存との交替についての示唆で、それを僕はアメリカ農業の歴史的運動へあてはめてみたのです。(二)(三)は、ロチェスターやその他に依存するところ少くないが、やはり全体としては僕が独立に書いたもので、別に新しい独創的意見は含んでゐないが、相当いい統計をつかつたつもりです。之等に於ても僕は、ただの農業の歴史でなく、農業を歴史全体の中でとらへやうと苦心してゐます。

第二節は、問題の析出であつて、抜くことは出来ないが、それ自身に独立の意義は少い。たゞ農業経営構成の州別統計は長いけれど、よく見ればずいぶんな事を知るでせう。第一節第二節は、結局問題を導き出す過程ですが、これが冗長すぎたのです。もつと問題は直載（直載）に導き出すべきだつた。ここでテンポがにぶつてゐます。

第三節ブラック・ベルト、之はアレンの *Negro Question* に専ら依つた。ここにはアレンの展開した非常に重要な、且つ中心的な問題はあるが、それはどちらかと云ふと政治的なので、簡単にしました。之はアレンのものをもつと検討して将来発展させてみたくは思つてゐる。

第四節、之はアレンにもウーフターにもブレネンにも一通りしかない。ここで僕の分析は漸く本格的になる。(一)(二)(三)は共に従来研究成果によつて総合的に説明したものだ、ここでクロッパ労働についての性質規定は、他の連中よりはつきりしてゐると思ふ。(四)は相当オリヂナリティをもつ。クロッパ労働を奴隷労働の遺物的形態としてはつきりさせ得たと思ふ。この辺からは数字によらず、形象的に把握しようとした苦心が出て来てゐる。ギャング・システムと家族割当制の問題も、僕のやうにはつきり設定したものは外にない（奴隷制時代はあるが）。プランターの三つの型も、正しい析出だと思ふ。之はスピヴァクのおかげだが。とにかく(四)(五)(六)は本書の中心的な部分で、僕も凡ゆる手段で努力したが、元来甚だ資料の適当なものなく、あれでせい一杯です。本当なら自分で直接調査せねばならない所です。

(七)前貸制度と労働の強制制（強制制）とを、どちらを先きに書くべきか、さう云つたことについてはまだ異論あるが、まづこの辺

で満足する外ないでせう。(ハ)の概括は、数字とブレネン等の結論と、大プランターの言とクロッパの言とでしめくくつて、成功してゐるのでないかしら。

第五節は、テーマとしても僕の独創です。第六節も同様。第四、第五、第六節でクロッパーパーンティション制度そのものを、その現実を、凡ゆる角度から分析叙述したのを、第七節で、歴史的運動の中で総合してみたのです。この第七節があつて始めて、第四、第五、第六節は歴史の中で、普辺（普通）の中で意味をもつてくるのです。また之等諸節では常に、歴史的なもの論理的なもの、個別的なものと普辺（普通）のもの、形象と抽象、之等をディアレクティクに交替展開させ、歴史的運動のディアレクティクを再現しようと企図しましたが、そのことは第七節で最も直接の課題になつてゐるのです。もつと書くつもりで書けなかつた。おひくく書いて行きます。

その後人々の見て来た所によると、日本橋の江戸橋の通り（三越前の通りの向ふ側（側））がずつと数百軒から千軒、すつかり焼尽し、石造の家だけ残つてゐるさうです。それから神田橋、錦町河岸、鎌倉河岸等一带数百軒。他は鳥居坂、浜松町、大門の方面一带、本所方面等です。知つてゐる人には被害（被害）さささう。朝になつても午後になつても燃えてゐるさうです。青山は罹災者百五十人ださうです。

幸子から謙一あて（一九四四年一月三〇日の記、二月二日の消印）

十一月廿日夜

往診から帰つたお父さんの話では、廿四日の空襲では原宿の東郷神社、新宿、世田ヶ谷に爆弾の被害が有つたとのこと。あの原宿の家にゐたら爆風でふつとんでゐたでせうね。そんな話を聞いたら、又々恐くなりました。

今朝（廿日未明）のも波状爆撃だつた相ですから、どうだつた事でせう。此の調子では、毎日く心の休まる時なく心配してゐなくてはなりませんね。夏なら家を失つても凌ぎ様もありますが、此の寒さに向つては耐れられませぬね。どうぞ無事であるよう（や）、せいぜい何かに向つて祈る他はありませんね。今夜は□（氷）雨の様な淋しい雨の夜です。どうも気のめいる様な重苦しい気持に落ちこみます。どんな不安にも心配にも耐へて生き抜く事が出来る様に、自分をげます様にし度いと願ふのに。

これから第七節の九と一〇のノオトです。プランティション制度と云ふ致命的な病気をえぐりとらず、A・A・Aだの

リハビリテーション、リセツツルメントだのB・J法案だのと云ふ湿布や膏藥療法では一時凌ぎで、根本療法ではありませんね。それにしても再建時代にうつかりと見のがした病根は、何と大きく成長してしまつたものでせう。今では半身を切りとる外科手術の他はありませんね。

では今夜はこれでやめませう。それにしてもあなたが早く安全なところに仕事を移せたらどんなにいいことか。これからもつとくいろいろな形でやつて来るであらう苦しみを恐れて尻ごみしてゐるのか、何だかよくわからないのですけれど、一若しさうなら尻ごみせず敢然と凡ゆるものを受けいれる姿勢になれるまで、あなたとの確信的な生活を得たいものだと思はずにはゐられません。あなたの今の生活を無理にこはすつもりはないのですけれど、あんまり心配でやり切れないんです。これも結局苦しみを避けたいからでせうか。あなたと一緒に相場の困難も耐えてゆけるだらうと思ひますが、一人ではまだく自信がありません。でも、其の事で氣を使はぬ様にして下さい。自信の持てる方向へ、一生懸命にゆくつもりはあるのですから。

謙一から幸子あて（一九四四年二月一日の記）

十二月一日（金）曇

昨夜は冷雨もふりやまず、風が戸をゆすぶり、こんな夜また敵機が来たらずい分憂鬱だと思ひながら、非常袋に粉や米や重曹、塩、ササゲ豆等の食糧をつめ、救急箱を用意し、小さいトランクにはローソクとあなたの手紙と切符や通帳、僕らの原稿等をつめ、頭布、鉄カブト、防空服、時計等を枕元において、非常用意オサく怠りなく、雨戸もすつかりしめて十時頃寐ました。来るか来るかと思つてゐたが幸ひ来ませんでした。

一昨夜の何千或ひは何万の罹災者は、あの雨の夜をどんな思ひにすごしたことでせう。昨日の夕方、手紙No.31を出しました。日本橋通りの片側が白木屋の裏から江戸橋、昭和通の向ふを含む広さで今川小路辺までなくなり、神田橋から錦町河岸までが原つげになると云ふ空襲を、殆ど知らずに寐てすごしたことはやや異常だつたらしく、誰もが人づてにきいた人も含めて、「いい度胸だ」とほめるやうな呆れるやうなことを云つてゐます。それほど凄くて大ていの人が防空壕の泥まみれになつたのださうです。だから昨夜は良心的に準備したのです。

ところでこの空襲で、どうやら僕の「ブランテーション」の運命もはかないことになつたかとも思はれます。と云ふの

は、小川町は大丈夫ときいたが、一応伊藤書店の鶴田君に見舞電話をかけたところ、「無事です。だが之以上は電話で云つちやいけないんです。それより来週始めにおうかがひしたいがどうでせう」「ああ結構です」「実は『プランティション』の出てくるのがちよつと遅れさうなんです」「いつ頃になりますか。今年中には出ますか」「それがちよつとむづかしいかも知れないんです。そのおわびかたがた、とにかく来週お伺ひしませう」「ぢやお待ちします」と云ふ風な具合だったが、その時僕は、紙型か紙が焼いて了つたのぢやないかなと感じたのです。とすれば、こんな風な空襲がまだ続くことを予想して、プランティションの出版は殆ど絶望的なやうに感じる。空襲が来はじめるまでに何とか出版までこぎつけてほしかつたし、鶴田君もしきりと急いでゐたのですが、いかにせん、印刷やその他の僕達にどうにもならないことで、今の時局では間に合ふことも許されなかつたのでせう。多くの人々も、今の僕と同じ思ひにあるのでせう。やりたいこと、いのちをかけても実現したいこと、に蹉跌して。

だが、そんなことより、何千何万が家を失ひ、幾人かは家族や自分の生命をも失つたのだと思ふと、僕の悲しみはまだまだ軽い。まだすつかり絶望と云ふのではないが、たとひ絶望であつたとしても、あれを書くことで自分を成長させ、あなたとの結合をも深め、あなたの認識力の成長にも役立つたとすれば、それだけでもよかつたのでせう。ましてや、今となつて、いろんな所に不満が出来、書きなほしたいところも多いのですから、将来の時代に完成出版出来るやうに、新たに勉強すればいいのです。さう考へて、最悪の場合も立ち直れるだけに気をとりなほしましたから御安心あるやう。今日の雨は、空襲に家を失つた人々にどんなに無慈悲な雨のことか。今夜も十分に準備して寝ませう。睡眠不足の感です。一昨夜はぐうぐう寝たが、昨夜は二、三度眼がさめました。臼田君も一週間ぶりにあらはれました。

「すつかりすんだ？ お葬式は？」「すつかりすみました。でも納骨は今出来ないですよ」「大変だつたでせう。人が死ぬことは簡単だが、一人一人死んだあとのことは甚だ複雑で面^{めん}仆^{ぼく}でせう」「でもそれより空襲大変だつたんですね」「君は高崎でおじけづいて帰れなくなつたんだらうと思つてゐた」「あたしのあのこともすつかりすみましたわ」「あの事？」「彼とのこと。やつぱり駄目なの。あたしの気持も考へもわかつてくれないうですわ。わからないつて云ふんですもの」「ふうん。どうわからないんだらうな」「でも、あたしとてもさつぱりしたわ。失恋と云ふ感じしないわ」「森井さんと此の間も話したんだがね。彼女はあんたがなやんでゐるのは、苦しむのがいやだからだと思つてゐたんだ。つまり君が彼氏とまだびつたりしないままに結婚するとすれば、苦しまねばならないだらう、その苦しみがいやだから思ひ切つて結婚出来ないでゐるんだらうと、かう云ふんだ。僕はさうは思つてなかつた。君は彼の感情にも自分の感情にもはつき

りしないもの、納得出来ないものがあつて、さう云ふ気泡がある限りは本当の結合が出来ない、その気泡がどんなものなのか性質がわからなくて苦しんでゐる、なやんでゐる、ためらつてゐる、とかう思つてゐたんだ。さう森井さんにも云つてみたんだがね」「そりや菊池さんのおつしやる方が本当ですわ。あたしはこの九月以来、彼の愛情にもあたしの愛情にも疑問が出来て、どうにもそのまま結婚する気にはなれなくなつたんだわ。でもお手紙を書いて、はつきりわかつたの。そして彼から、あたしの気持ちに無理解な手紙を受取つた時、すつかりすんだ気がしたんだわ。ところがあたし、その返事を受取つて、何ともなかつたのよ。ショックも何もなかつたの」「そりや君はその返事を知つてゐたんだよ。君が手紙を書いてゐた時、すでに君の気持はきまつてゐたのさ。だから君の手紙自体が、もうその返事を予想して書いてゐたと云へる。それを僕は警告したんだがなあ。手紙の書き方を注意したらう、あの時。慎重に書かんといかん、相手に反省させるやうに、相手の感情を刺戟しないやうに、事態に必ず余猶よこすがらをもたせるやうに、だんく／＼互ひに歩み寄るその足場を用意することを忘れないやうにと。ところが君は一しや千里みたいに書いてゐたね。危いなと思つたんだ。僕は君達の間にも矛盾があれば、それはほつておかないがいい、あいまいははつきりさせる、そしてどうしてもいかなんなら解消する、と云ふことには賛成だが、それまでに凡ゆる角度から凡ゆる方法で、折角それまでに至つた人間関係を検討し、その実現に誠意ある努力を尽すことを正しいと思つたんだ。判断は君がやる。僕は判断の方法と規準とを示唆する。それにしても一回ぐらゐの文通ぢや駄目だよ。もつと相手を説得すると云ふことを考へてごらん」。

「駄目ですわ。そりや彼の方は決定的な文句はつかつてはゐないわ。でもあたしはすつかりすんだと感じてゐるの。そしてね、とても解放されたやうな、何だかのび／＼したやうな、視野が広がつたやうな感じがしてゐるのよ。今まで何だかとても囚はれて来た感じよ。あたし、いはば失恋したんでせう。それにちつともそんな気がしませんわ。むしろ何だかあたし強くなつたやうな気がしてよ。独立独歩で云ふ感じよ。勝つたて云ふ感じね。実際あたし、兄が死んで、本当に独立してやつて行かなくちやならなくなつたんですわ。そしてね、今までのあたしが本当に、菊池さんのおつしやつたやうに甘かつた、イージーゴーイングだつたてわかつたわ。何だか脱皮したんだわね」「さうかも知れない。一つ卒業したんだな。だがね、君の今の体験をただ簡単に脱皮せず、どこに矛盾があつたか、どこにかくなつた理由があつたか、を充分反省することが必要だよ。今、君の精神は君自身に対する勝利の感情で、非常にエネルギーに充ち躍動の姿勢にある、一番活動的なポーズにある。それを以ていろんなことを充分考へるんだ、人間と云ふもの、人間関係と云ふもの、自分と云ふもの、社会と云ふもの、そして歴史と云ふもの。そしてたらもう君に甘いなどとは云はないね」

「エルステ・リーベ・イスト・フェルロールネ・リーベて云ふんですつて。どうつづるんですか」「エルステ・リーベ（初恋）はわかつてるだらう。フェルロールネはファウ・エ・エル・エル・オ・エル・エヌ・エ Verlorne（失はれたる）さ。エルステ・リーベと云ふのは女なら大てい十五、六から二十前後、男なら二十から二十四、五の間によくある。それは観念的な要素が強く、大部分は失敗する可能性が多い」「そして初恋の失恋と云ふのはそんなにいつまでもあとを引くものでせうか」「さうとは限らない。二つのありかたが考へられる。初恋を止揚してツヴァイテ（第二の）リーベに本当のよきリーベをなし得た場合は、エルステ・リーベは決して悪いあとを引かない。所が大ていは、エルステ・リーベに余りに理想主義的な観念的なやりかたをやつて失敗するもんだから、そのあとで迎も卑俗になつて現実と妥協してしまふんだね。それは敗北だ。敗北者に対しては初恋の失恋は長くあとをひくことになる。君が今勝利者として出て来たのなら、大したあととはひかない。たか／＼淡いセンチメンタリズムを感じるぐらいだらう」「さうでせうね。でもふしぎよ。少し前まであんなに、三年間もあんなに想つて来たのに、あの手紙を書いてからは、それまで想つて来たことがふしぎなほど、感じが退いてしまつたのですもの」「だから僕が云つたらう。本当のリーベは一方だけでは成立するものでない、相手が自分を欲求しないのに、こつちから相手をリーベとして欲求することはあり得ない、一時的にさう云ふことはあり得ても持続しない、本当のリーベは相對給附だ、そしてリーベの段階が深くなれば、相手が自分を欲するか否かが自分の相手への欲求に実に微妙に反応するものだ。しかし、君は勝つたが、竹中君は駄目だよ、どうやら」「あら、あんなにこの間、延期すると云つたのに」「云ふだけなら何とでも云へるさ」「竹中さんにお話する時は、あたしがゐる方がいいんぢやないでせうか」「さうでもなからう。その点は彼のいい所だ、さう囚はれてはゐないよ」「さうかしら」。さうかうしてゐる所へ、驚くほど着ぶくれた竹中君が、今日は少し遅くあらはれた。

「おや、白田さん、帰つたの」「それより君のこと話してゐたことだよ。しつかりしてほしいつてね」「うん、あれか。その中君にすつかりいきさつ報告するよ、どつちになつても」「報告なんか問題ぢやない。本当によく考へてしつかり行動するんだな。それより疎開のことぐらゐ考へた方がいいね。かうなれば結婚どころぢやないだらう」「さうなんだ、両親を疎開させたいんだ」「そしてね、僕も、君の嫁さんのかはりに君の両親の世話をみてくれる人をさがしてみようと思ふんだ。どうしてもそんな変な結婚しないやうにね」「うん」「竹中さんもあたしとよく似てゐらつしやるわ。イージー・ゴーイングなんぞでせう」「さうだな。どうしてもさうなんだよ。それが性格なんだよ」「さうぢやないわ。だつて、イージー・ゴーイングであると同時に、そのことに抵抗も感じるでせう、イージー・ゴーイングはいけないと云ふ反省よ」

「うん、さうだね」それがいいのよ。その面をもつと強くするんだわ。あたしも今度はさう云ふ風に行動したわ。そしてら逆も自信がついたわ。竹中さんもやってごらんさいよ」「さうだよ。臼田君は自分のリーベの問題を自分の力で解決して、世界が前よりはつきりわかるやうになつたと云つてるんだ。君だつてさうだよ」「うん」。

「僕はね、リーベくゝて云ふが、決して恋愛至上主義ぢやないよ。大体恋愛至上主義と云ふものは、芸術至上主義同様前世紀末以来の、歴史の主体としての自信を失つたプッチブル・インテリのイデオロギーの一つのあらはれだ。未婚の人間の恋愛と云ふものが世界の文学にあらはれた歴史を考へてみるのも面白いよ。イリアッドやオデッセイでは、さう云ふリーベは余り大きくはあらはれない。イリアッドの原因はパリスとヘレンの恋だが、ヘレンは人妻だし、イリアッドの中では、二人の恋愛のモメントは殆ど出て来ない。それよりアンドロマイとヘクトル、ヘカベーとプリアムスのやうな、夫婦の恋愛感情の方が重要だ。オデッセウスでもオデッセイとペネロピとの夫婦愛が主要モメントだ。ナウサイケアとのリーベは美しいけれど、まだ中心的テーマぢやない。それからピンドロス等の抒情詩は別として、ギリシヤ悲劇に來ても、やはり夫婦愛が主だ。之はさまざまの人間関係の最も重要なものとしてあらはれる。所が恋愛が人間関係の最も重要なものとしてよりも、特殊なものとしてあらはれるのはユーリピデスに於てだ。このことはギリシヤ民主主義が爛熟して、もはや歴史的前進運動として顕著な姿にあらはれなくなつたことを意味する。かう云ふ時代は所謂社会問題、問題劇をうみ出す地盤らしい。それはまたヴィナスがだんくゝ着物をぬいで行く過程でもある。ヴィナスは生む神から、だんくゝ恋愛の神になる、美の神になる。プラトンの恋愛、プラトニック・ラヴもこの時期のものだ。だからプラトニック・ラヴの耽美的傾向を、ダンテのビアトリイチェに対する恋愛などは峻別しなくちやならないのぢやないかな。外見は似てゐるが。第一プラトニック・ラヴの対象は本當の意味の女性ぢやない。此の時期の女性はまだヘタイラか全然社会生活をもたない人妻だからね。ビアトリイチェの近代的形象とはまるでちがふ。丁度プラトンとダンテとちがふやうにね。それからアレキサンドリア時代を経てローマ時代に入る。すると例のエネアスとデイドの恋だ。之はアントニオとクレオパトラの恋を頭においてゐたらしい。ここでは明かにリーベのモチーフは、政治的モチーフと背反し、悲劇的な壮大さで後者のために克服または屈服させられる。テレンチウスなどの家庭劇には、まだリーベの恋愛道德の本當の昂揚はない。ローマではやはり本當の恋愛道德は、ギリシヤ程度にも独立的にあらはれなかつた。帝政時代などは全くヘタイラ的なリーベしかなかつたらう。中世はキリスト教的ストイシズムで、恋愛感情圧服の時代だね。中世末紀（中）の騎士物語あたりから、恋愛は極めて観念的に、また余り切実でない姦通と云ふ形で、お人形のやうにあらは

れ始める。

それからダンテだ。ダンテのピアトリイチェへの恋には、理想主義で抽象的にされてゐるとはいへ、真の人間関係、真情としての恋愛道德の偉大な昂揚がある。之は中世から近世への転換の進軍ラッパのやうだ。またフランチェスカとパウロの恋は、中世の騎士の姦通ではもはやない。それは形式ではそれに似てゐるが、内容では市民的人間の真情の熱烈な、ローマン的な発揚だ。だがそれは公的歴史的運動と必ずしも合致しなかつた。そこに恋愛至上主義的要素があつたのだ。だからダンテは之に満コク(ミ)の同情を感じつつも否定したのだ。地獄の空をはてもなくひょうくくと旋回する怖しい旋風の中へと否定したのだ。ポッカチオ、ペトラルカ、またはチョーサーになると、市民的人間関係、市民的モラル、人間解放のモラルとしての自由な恋愛が開化(開)する。だが之はまだ歴史と共にたたかふ戦斗(闘)的なものとしてかどうか。ところがシエクスピアになるとすごい。「ロミオとジュリエット」で恋愛は、全封建的モラルとの真向からの斗争、従つて歴史と真に一体になつてのリーベの昂揚がある。このリーベは偉大になる。市民的リーベではあるが、既に全人類的に（歴史との合致によつて）昂揚された人間的リーベがある。カルデロン、ローベ・ド・ヴェーガ、セルバンテス等にもそれがある。かくの如きルネサンス的恋愛、封建的モラルと近代的人間解放モラルとの純粹な斗争の最も重要なモメントとしての恋愛は、若干の消長を以て、ヴォルテール、レッシング、ゲーテあたりまでつづく。その間に宮廷的なサロンの恋愛モラルが、ポッカチオなんかの市民的なそれによりも中世的騎士物語のそれにつながるモラルが、エフタメロンやクレヴの奥方や、フランス古典劇にあらはれ、ポッカチオの純粹の延長はモリエールなんかに発展させられる。モリエールにはシエクスピアの市民恋愛劇、ロミオ劇と區別出来る、例へばウインザーの陽気な女房式のもの、との共通のものがある。

十九世紀に入るとブルジョアの恋愛小説がはじまる。バルザックはその最大のものだが、バルザックでも、少女と少年との恋よりも、もつと複雑な人生關係の一部としての既婚者の恋愛の方が重要だ。それはちよつとギリシヤ時代に似てゐる。だがバルザックでは、既婚者や青少年女のリーベが封建的なものと斗ふと共に、ブルジョア的な金銭主義との斗ひを重要なモメントとしてもつ。そしてそこには何等恋愛至上主義はない。かくして十九世紀後半の恋愛至上主義時代に入るのだ。ブル・インテリの歴史的基礎喪失と共に。尤も遅れたロシアでは、アンナ・カレニナのやうに、バルザックより前の段階の、ルネサンス的、中世騎士道的、それから十九世紀末的な諸要素の渾然ある融合がある。だが、この時代の文学の主流、フランスでは、恋愛小説の黄金時代ぢやないかな。そして夫々には恋愛至上主義的なものがあらは

れて来てゐる。恋愛者は歴史から遊離する（ドイツのヘッベル、ルドヴィヒはレッシング、ゲーテの延長的要素がある）。他方、ユーリピデスのな問題劇が、イブセン等にあらはれる。ロマン・ローランすら恋愛至上主義の影響から脱しきらない。アンネットにはさう云ふ所がある。尤もアーシャとかジョルジュとかに、さう云ふ影響を脱したモメントの成長も見られ、そこにロマン・ローランのえらさがあるんだらうが。とにかくアンネットは女的すぎる、……」（以下省略）。

幸子から謙一あて（一九四四年二月一日の記、二日の消印）

十二月一日

廿七日附、廿八日附、お便り落手致しました。

廿七のは、鎌倉であつたのですね。本当に此の頃は、一寸も外へ出られませんか。何処であふかわかりませんが、本当にみつちやんたち、お気の毒でした。雨の日などに背負つて出ない様に、此の前行つた時注意したのですが、家に置いてゆくと、ねずみに噛られると云つて、ききませんでした。ねずみの被害よりも肺炎の方がずっと危険ですね。それに、ひるま下に人がゐる時、ねずみが出て来るなんて、めつたないと思ふけれど。今更云つても、し様がありません。

あなたのおなかの様子はもういいのですか。此の頃は一度おなかをこはすと、一週間かかりますから恐いですよ。内藤嬢から手紙が来て、海軍館東郷神社に直撃弾が落ちたと書いてありました。青山五丁目のと両方の爆風と焼□弾で、もと私たちのゐたところは、どんなになつたでせう。ぞつとします。

今日は、昨夜からねあせと熱でなやまされ、目が□□くくするので、一日何もせず、本もよまず、ぐうぐうねむつてばかり。滝の川の夏時代、私がよくぐうぐうひるねばかりしたのでせう。あんな具合にいくらでもねむれます。どうも今度は確実らしいの。今度は気持ちもきまつてゐるし、多少の経験もあるし、人手もある事ですから、一寸も心配せず安心してゐられます。本当に楽しみになります。身体も随分抵抗力が出て来ました。唯、それまでにあなたが安全なところに移れば申分ないのです。もつとく慾を云へば、無事に生れて、一緒に育て上げる事が出来ればね。

夕方、一寸起き出して食事にゆき、二階に戻つて手紙を書いてゐるところです。今日は勉強も読書も休みです。たつぷ

り睡眠をとつて、風邪を追ひ出すつもりですから。では今日はこれでおやすみなさい。御ぶじを祈り乍ら。 幸子

謙一から幸子あて（一九四四年二月二日の記）

十二月二日（土）晴

お天気だと気の重さもやや軽くなる。

郵便受けに失望。僕のは届いてゐるかしら。廿六日夜からずっと連日出してゐますが。警報が出るかも知れないので、今日はやや早目に野菜を買ひに行きました。小包みは今日も多勢並んでゐるので出しそこなひました。

麦のみのる頃から、陸稲、いも、も過ぎて、土の黒さの目立つ初冬まで、見なれ歩きなれた例の道を歩きながら、「武蔵野の秋をしんみり味ひたかつたけど、何やあはただしかつたねえ。もう落葉や」と西井君。「武蔵野の秋の名残りを、秋雨の防空壕でしんまで冷えるほど味はつたんぢやないか。それにしても今年の秋は、天は高かつたかどうかわからぬ、馬も肥えたかどうか知らんが、少くとも西井君は肥えたね」「本当や。十七貫ぐらゐかな。肥つて困るほどや。僕は上半身が肥る」「大八木氏（百姓）のおかげだね」。その大八木氏、今日も僕等の姿を見るや、大きなかぶらをとつて来て五貫目くれました。「嬢ちゃん、ええものたべてるね。どうしたの、そのパン」「もらつたの」「誰に?」「ケンちゃんに」「ケンちゃん? ケンちゃんて誰やね」「あれ」「配給のパンか」「ちがふ。も一つあるよう」「ええパンやね。家でつくつたんやないね」「学校でもらつたんだよう」「ああ、学校か。学校はええもんくれるね」「西井君、そんだけ肥つても、子供のパンまで気になるらしいね」。大八木氏の倉にはいもやその他の俵などがなくなつて、疎開荷物らしいのが天井までつまれてゐる。「あれえ、疎開らしいね。どこのだらう、帳簿だね。カハシマ商会か」「何だつてカハシマ。兜町ぢやないか。やつぱりさうだ、有価証券取引帳なんであるよ。危いと疎開したもんだね」。

お昼は、僕（マメ御飯とトロコンブ）、竹中（弁当にごましお）、堀江（弁当にいろんなおかず）、白田（弁当、煮コンブのおかず）の四人で、コンロをかこんで日なたぼっこしつたべる。食後、話はいつの間にか例のところへ。例へばこんな風に。

竹「本を少し疎開するから、どこかへおいてくれるだらう」「どこでもいいよ。あいてる所へおきたまへ」。白「竹中さん、バルザックを疎開なさいよ。そしてあたしに読まして下さいな」「さうだな」「あたし拙もバルザック読みたいの。

何から読んだらいいでせう」「それや、いろいろあるからな、何がいいかな。幻滅もいいな。だけど無神論者のミサを
読んでごらん。短篇だ。君はまだなんだらう」と竹中君へ。「うん。幻滅は読んだよ」「森井さん、あたしのドストエフ
スキー全集買っちゃったわよ」「森井さんはドストエフスキーが好きだらうな」「あら。まだ読んでるらつしやらないん
ですよ」「そいぢや好きになるだらうね。わかるよ。誰は何を好きがるかが。竹中君なんかドストエフスキーだな」「さ
うだな。だけど僕はバルザックも好きだよ」「君のやうにあまいのにはバルザックのよさなんかわかりやしないさ。も
つとまじめにならなきや、バルザックやシエクスピアはわからないよ」「さうかも知れないね。だけど僕はね、バルザッ
クには理想的な人物が出て来ないのが好きだよ」「変なこと云ふなよ。バルザックには偉大な人間はいくらでもゐるよ。
無神論者のミサのデプランや水汲み人夫、田舎医師のブナシス、絶対の探究のバルタザル・クラリス、幻滅のダニエル・
ダルテス、ダヴィッド、ジョセフ・ブリドゥ、ピアンション、ルイ・ランベエル、追放者の中のダンテ、その他女にも
男にもずい分あるよ」「だけど僕はダニエル・ダルテスカ、あれよりリュ何とか」「リュパンブレか、リュシアン・リュ
パンブレだらう」「さうだ、あれの方が好きだよ」。

「君の好きさうな型(タイプ)だ。君は健康なものが好きぢやないんだ。ドスエフスキー下脱なんか好きなんだ。ドスト
エフスキーのいけないことは、廃残者を芸術的輪光の中へ美化したことだ。しかも彼の廃残者は、本当の意味の廃残者
だ。たたかひに敗れ、たたかふことをやめた廃残者、歴史がもはや容謝ゆるみなくそれをのりこえて行かねばならない廃残者、
へ必要以上の同情を示して、事実上人生の廃残を甘やかし、従つて歴史の眞の方向を歪曲したのだ。不健全なものへの
愛着は、本当の意味の同情ぢやない。むしろ一種の嗜虐趣味だよ。不健全、廃残への嗜虐的愛着は、人生に於ける眞実
なるもの、進む者、斗ふものへの背反だ。人生を、歴史を愛し、それに参加するのではなく、進まうとする人々を嗜虐趣
味へ溺らせ、歴史と人生とを侮辱するのだ。しかも人を随喜させるやうな芸術的輪光の中で。唾棄すべきだ」「そりや
さうかも知れないね」「そして君はさう云ふものが好きなんだ。たたかふことに臆病で、ふまじめで、逃げることばか
り、ごまかすことばかり考へてゐる廃残的人間は、美しいかくれがが必要なんだ。うつし世のあらからかくれるかく
れががほしいのだ。逃げこむ竹やぶがほしいんだ。竹林の七賢人のやうにね。竹やぶの中で蚊にくわれながら駄弁つた
り、自分達を甘やかしたりするんだ。実際ドストエフスキーなんて、廃残者のかくれ穴の集大成だ。君なんか海辺の蟹
のやうに、どの穴へは入らうか、うろくするくらいだ。バルザックにはそんなものないよ。バルザックの中では人生
の廃残者は、輪光なんか与へられないよ。それどころか、歴史に参加する偉大な人々によつて容謝なく否定されて行く。

シエクスピアだつてさうだ。フォールスタッフなんか、ウィンザーの陽気な女房共に笑ひ者にされて醜態をさらす。君もうっかりするとフォールスタッフだよ。久しく自分の膝を見たことがないと自ら称してゐるが、今の日本にゐたら、君みたいに十貫もやせて、自分のだらしなく何にでも屈する膝を、いやと云ふほど見たことだらうよ。オブローモフやフォールスタッフや駄目だよ。君の生活の歴史的地盤は、彼等と共通してゐるんだからね。みんな歴史的に没落する連中だ。しつかりするんだ。没落や廢残に対してもつと恥を知るものにならんといかん。無恥はいかん。没落や廢残や逃避には、何にも美しいものがないよ」「さうかなあ」「さうかなあぢやないよ。どんくゝのりこされて行くよ。若い人達は君のやうな者をどんくゝのりこえて行くよ。少し前は僕も、君をさう云ふ若い人々の一人だと思つてゐるが、今はちがふね。白田君は勝つたんだぜ。勝つと云ふことがどう云ふことか、白田君にきいてみたまへ。君なんか何を讀んでも、それがちつとも生活に関係しないんだからな。全くサロンのだ。白田君は『魅せられた魂』でも『母』でも、みんな自分の生活の中へ咀嚼しつゝ讀んだやうだよ。だから彼女はバルザックを欲求するんだ、ドストエフスキーを売り払つてね。實際ドストエフスキーの何が、君の今当面してゐる人生上の重大時に、君の判断なり君の行動なりに役立つかね。メイシユキンの白痴的行動かね、スタヴローギンの灰色のヒス行動かね、ミーチャの氣狂ひじみた突風行動かね、ラスコーリニコフの人殺し理論かね。君は幻滅を讀んでも、リュパンブレの敗残し行く姿にあこがれて、バルザックがリュパンブレの末路に、人生に於て眞実を忘れ、自らの人間性のためたたかひを自ら放棄し、自ら己れの人間性を放棄した人間に対する痛烈な批判を展開してゐるのを、ちつとも讀みとらない。リュパンブレは野心のために、個別的欲求のために、自らの人間性を保つことをやめ、人生と妥協し、ジャーナリズムに迎合し、そのことによつて次第に自分の才能を失ひ、自分の家族を損なひ、遂には自ら他人の奴隸になるんぢやないか。そのことが人間性の放棄、妥協と云ふことに對するどんなに深い警告を含んでゐることか。その警告を君はちつとも讀みとれないんぢやないか。君なんか何を讀んでも駄目だよ。まあせいぜいドストエフスキーの竹やぶで、やぶ蚊にくわれるんだね、かぶらの汁のやうな血をせいぜい吸はすんだね。君の血は赤くないんだから。本当にしつかりしろよ。冗談ぢやないよ。君のことだよ。眞剣に、まじめに、誠実になれよ」……。

あとで二人きりになつた時、僕はもう一度彼に忠告しました。「今君はやけになりかかつてゐる。本当にまじめになれよ。僕はいつまでもしつこく云ふよ。自分で立つてごらんよ。君の膝だつて本氣に立つてみると立てるんだよ。何しろかつては廿六貫の偉大な体軀を支へて来た膝ぢやないか。たつた十七貫になつて、支へねばならぬものがうんと軽くな

つてゐるのに、さう屈したがつちや駄目ぢやないか。そのことでまじめになれなければ、何でもまじめになれないよ。君があんなに本を買つても、本を読んでも、みんな空だ。何にもなつてゐやしないぢやないか」。懦夫をして起たせるやうな火の言葉がほしいのに、僕の貧しい頭ではどうにもならなさうです。

夕方、いねちやんが来ました。玉川用賀町の陸軍何とか廠（薬品をつくるところ）へ女子テイ進隊にならないかと会社で云はれたが、この辺に家があれば、なつてもいいと思ふと云ふことで、その相談でした。家は臼田君や森井さんのゐる下宿が二食つきで、いいかも知れないからきいてあげることになりました。疎開になるでせう。十二月八日からださうで、大急ぎで部屋をみつげ、疎開する必要があります。東京ではやはり世田ヶ谷が一番安全です。用賀と云ふのは、ここから二十町ばかり。歩いても行けさうです。

幸子から謙一あて（一九四四年二月三日付け、同日の消印）※

No.32のお手紙、四日午後三時頃着きました。伊藤書店からの電話―どうも芳しくありませんね。最悪を予想してゐた方がいいかも知れませんが、あきらめられませんか。つるたさんの話を直接聞くまではわからないけれど、―空襲の被害の方がしらす？ がつかり致しました。毎日、突然ひよつこりと本の届くのを楽しみにして来たのです。あんなザラ紙でないきれいな印刷ので、さんざん勉強したあと、一息によむことを随分楽しみにまつてゐました。そしてあれが出て、私達の未知の本当のよい読者から、何とか思ひもよらぬ声をきく事が出来ようとまつてゐました。でも、こんな風は一切駄目になつた様に考へるのも、早まりすぎるかも知れませんか。どうも今日も不健康で、半ねむり状態です。明日、お手紙書きます。

※この手紙の封筒は二月三日付けだが、手紙文には翌「四日午後三時頃」の記事があり、また「プランティション」刊行をめぐる謙一とのやりとりの内容などからも、後掲の二月三日夜記の手紙文より後に認められたものと推測できる。ただ封筒については日付け・通し番号とも、前後のそれと整合しているので、中身の便箋のほうが入れ替わつたのであろう。しかし個々の封筒と手紙文の対応関係を、確実に復元することは困難なので、ここでは現状のまま転写・掲載した。

幸子から謙一あて（一九四四年二月三日付け、四日の消印）※

お手紙拝見。

アンチゴネー、オイヂーブスの評価は確に仰せの通りでした。併しソフォクレスのエレクトラはどうも納得出来ません。ソフォクレスのエレクトラの限りでは、アガノムノンとアイギュストスの王としての比較は何も出てゐない。強いて出てゐるとすれば、コロスによつて、コロスたちがエレクトラに少々同情してゐるところから押して、アガノムノンに好意を持つてゐる位に察しられるだけ。妻たるクリユタイムネストラが夫であるアガノムノオンを殺すのが悪なら、子であるエレクトラとオレステスが親たるクリユタイムネストラを殺す事も同様の悪です。大体、アガノムノンは人の妻のために、はる／＼大勢の人間を殺しに連れて行き、トロヤでは勝ちきまゝをして、ずるい事ばかりしてゐた。そしてクリユタイムネストラと云ふ妻があるのに、何人も奴隷の女と関係してゐたばかりでなく、カッサンドラをのめ／＼と自分の館に連れて来る。どこにも同情すべきものは見出せない。クリユタイムネストラが彼を企計で殺したのがわるいなら、エレクトラとオレステスも、うそをついて殺したから同じ事です。

エレクトラは母を一寸も同情的に見てゐない。機械的に父殺し、夫殺しと幼稚な憎しみをこりかたまらせてゐる。むしろエレクトラの母へのにくしみは、正義と云ふよりも嫉妬からの方が多し。アイギュストスと母への嫉妬から。「エレクトラは、夫も子もなく、ほろびる自分」と嘆くところや、「母と共ねをする男」とアイギュストスをにくむところに、彼女の嫉妬は出てゐる。クリユタイムネストラとアイギュストスとの結びつきだつて同情出来る。何故なら勝ちきまゝの夫に対する憎悪は、夫に対する愛の消滅で、—さうなると名のみで、事実上彼女の愛人であり夫ではないから、他に愛情を求めてアイギュストスを得ても不思議はない。エレクトラは其の間の事情を理解出来ず、かたきうちでこりかたまつて弟までもさう云ふ風に煽動するなら、クリユタイムネストラが彼女たちをにくむ様になるのは当然です。まはりの人民もエレクトラ同様、機械的な夫婦関係しか理解出来ぬ人達です。かんとんにクリユタイムネストラを夫殺しとしてにくむ。さう云ふ情勢の社会の中で、クリユタイムネストラのする事は、皆わるく判断される事です。エレクトラが真に立派な女なら、弟をして母殺しをさせぬ事、無意識の弟までもその中にまき添へせぬこと、弟独自の偏見のない考へにまかせること、自分は自分の思ふまゝ、彼女の家に不平タラ／＼すむよりは、他国へゆけばいい。

アガムノンは殺ろしてよい男だったのです。トロヤでして来た彼の生活から、彼が人民の王たるにふさはしくないと同時に、人の夫たる男ではない事を証明出来ます。彼は戦場には出ないくせに、ぶんどり物の分配の時は出しやばつて、大将面をして人の分までもむさぼるのです。心は小さく、ねたみ深く、欲張りで、ずるくて、高まんで、人の上に立つ人物ではありませんから。さう云ふ父に同情して、仇うちに生命をかけるのは、エレクトラが馬鹿なシヨークです。世日未明のは大分おそろしかった様ですね。世田ヶ谷の方は今のところ無事でも、永久にぶじである筈はない。嫌な事です。

プランティション第七節、他のものと比較してでなく、あなたの書いて来たものゝ中で、前に比して熱が足りないと感じた事は、何処がどうと云はれても、感じなんだから云ひ様ないわ。あなたの云ふ様かも知れません。熱が足りないと言ふことは、表現についての事で、内容の事ではない。内容はあなたの試みた通り、そのまゝ出てゐるのですが、前の方に比して色がうすい様に、私には感じられたのよ。

昨夜は胃けいれんを起して、今日はおそくまでねてゐました。今日も何もせずねてばかり。すこしよくなつたら、第七節もう一度よみ返してみませう。

※この手紙文は二月三日夜付け、四日消印の封筒中に挿入されていたが、元は一つ手前の二月三日付け、同日消印の封筒に入っていた可能性がある。

謙一から幸子あて（一九四四年二月三日の記）

十二月三日（日）快晴

十一月廿日付（38）拝見。何だか久しぶりの感じですよ。

身体の具合が悪いとのことですが、いかがですか。充分注意して下さい。また、それが理由の考へられるやうなことであるなら、なほ一層注意して下さい。それは僕の将来の希望の星かも知れませんか。

今日も空襲がありました。この辺は無論無事でした。この上空を六編隊ばかり（六、七十機）、此の間よりは低く、恐らく六千米ぐらゐの高度で敵機が飛びました。今日も空は美しく、まわたのやうな純白のちぎれ雲が時々西から東へ、

可成り早い速度で飛ぶだけで、全く底抜けのやうな青さでした。鉄カブトをかぶつて、防空壕のそばで、警報によつて出て来た西井君と小使婆さんと三人で、尤も小使婆さんは敵機来襲の鐘のなる度に例外なく防空壕へは入りましたが、とにかく青空ばかり見上げてゐると、すっかり首がくたびれました。幸ひ二時間ばかりで空襲警報も解け、今、五時には警戒警報も解けました。

お手紙の「風と共に」の批評、中々立派です。そんな風に物を読めば、完璧（壁）です。政治的批評も、個人の行動、ありきたなどの批評も、恐らく之まで「風と共に」についてあらはれた批評の最高のもつたのだと云つていいでせう。僕の「プランティション」が、あなたの「ペラグラ」批評や「風と共に」の批評に立派な結実をもつたのだと考へることは、何と云つても嬉しいことです。之からは僕の歴史論にしろ何にしろ、十全にあなたを目あてに書けます。最良の伴侶的理解者としてのあなたに。「風と共に」は、芸術的には高度でないが注目すべきで、僕も反感から二巻まで大ざっぱに読んですぎないから、もう一度読み返すつもりです。でも結局あなたの批評と同じやうなことを感じるだけでせう。文学の批評は、ドブローリューポフ的であるべきです。日本でのその系統は、岩上君などに受けつがれてゐます。そしてあなたの「風と共に」の批評は、たしかにその線にのつてゐます。

この間中の僕の手紙の多くの紙面をしめて来た竹中君の結婚問題も、ぼつ／＼おしまひでせう。結局僕の敗北らしい。竹中君に結婚のとりもちをやつてゐるのはA君なのです。A君については数回書きましたね。坂本君のフラウの友人で、神戸女専を出て、竹信か竹原の和英辞書編纂を手伝つて、昨年春から英研には入つて、この十月にここをやめ、西川と云ふ英国帰りの四十男と結婚したあの女性です。A君は以前から僕が竹中君にしゃべることを、一々そばへ来てはよく聞いてゐた。こちらへ来てからも、時々二階へやつて来てはいろいろな問題、この分室の人間関係のこと、その他のことで、さもよく理解出来るると云ふ風に僕の話を書いた。そして恋愛結婚の一種として、突如みんなをあつと云はせながら結婚したのです。昨年彼女が英研に来て暫くは、僕も竹中君も彼女の表情の過多、いつも自分へ注目を集めやうとするあくどいジュスチュア、他の女事務員に対する競争意識の不自然な露発、買ひ出しや物資調達への強引ぶり等々を不愉快に思ひ、時には直接彼女に文句も云ひさへしたものです。谷川君に到つては彼女を他の人とかへてくれと庶務へねちこみ、庶務でも彼女はどこでも引きとり手がなからと云つて、困つたかたちでまんしてくれと云ふことになりさへした、さう云ふ女性でした。それが竹中君や坂本君などの直言が若干きいたのか、今年になつて少しづつ席にもゐつくやうになり（それまでは買ひ出しで席をあたためるひまもなかつた）、経堂分室に来てからは仕事もまじめにするやう

になり、竹中君の応召前後からは竹中君の個人的な問題にも親切を尽すやうになり、彼の留守中は、しきりと竹中家へ出入りして両親の淋しさをなぐさめ、野菜をとどけ、九月頃には彼の母がどうやらあたしと一緒に住んでもらひたがつてゐるが、どうしたものかしらと僕に相談し、僕も彼が十月に帰るとは思つてゐなかつたので、それや彼の両親も寂しいんだらうから、あなたさへよかつたら同居したければいいぢやないか、竹中君にも一応相談してさ、と答へ、さうね、考へてみませう、と云ふことにまでなつたが、間もなく、やつぱりあたしの家では余り賛成しないからよしたわなどと云つてゐたのです。それが、それから一ヶ月も立たないのに、帰つて来た竹中君を尻眼にさつさと結婚し、しかも恋愛結婚だと云ふ。彼女は竹中君の召集中は始終手紙を書き、白田君などにも「竹の子はいい人やわ。あんなすなほな、いい人はないわねえ」などと云つたりしてゐたのです。

元来竹中君は、一人息子のお母さん子には典型的な依頼的依存的性格をもち、さう云ふ非独立心、他力主義が一面、人の好き、素直さともなつてゐたくらいで、彼の都会人的な或ひは金持的なディレッタントイズムも、結局彼の依頼的性格、他力本願的性格を紛飾し、更に甚だしくしてゐたのでせう。さう云ふ性格にとつては、A君の少し奇矯にも見える線の太さ、大ていの人の反感を挑発するやうな強引さ、遅れた形態の自己主張主義、人もなげなエゴイズム、関西風の猛烈さ、あの町奴趣味やサーカス式の厚化粧に到るまで、それらの始めは嫌悪以外の何ものも感じさせない性癖の総てが、やがて何だか魅力になつてくる。自信のない精神は、肥大せる自信を見ると嫌悪するが、同時に魅かれはじめ。おまけに自信のないディレッタント、サロンのディレッタントが、既に必然の経緯を以てドストエフスキーに毒害されてゐる場合、即ち不健全なものの病的なものへの異常な嗜虐的愛着に毒害されてゐる場合、さう云ふ魅力はだん／＼実体的なものになる。病的なもの、不健全なもの、ひずんだもの、廢殘的なもの、かくれがちなもの、あいまいなもの、非合理的なもの、非歴史的なもの、遅れたもの、それら一切のものへの嗜虐的愛好、恋着は、自信のないもの、自らの歴史的進路にも個人的内容にも自信のない、独立性のない、それ自身で廢殘的宿命を自らに感じる者には、自己弁護であり、自己の現実にみにくさの観念的美化であり、紛飾なのです。さう云ふ者は、健全な形の自己の対極者よりも、むしろ誇大され畸形化された対極者に魅かれるのでせう。竹中君の、突然ヒラリと結婚して了つたA君に対して感じた牽引は、そんな風に解されるのではないかしら。A君の親切さはたしかに彼にとつて、彼女への好意の最大原因だつたらうが、僕はA君の親切さに計算された業々しさ、別にどうと云ふ形のある利害を打算したのでなく、自分が親切な人間であると特に自分自身に対して納得させるやうな計算だが、さう云ふものを感じた。田舎の世話役などによくある。原宿の吉

田老人の場合もさうだ。エゴイストの親切さ、此の場合の親切さは「意識された」ものである故に却つて人間的でない。元来さう云ふ余り個性の豊かでない彼が、兵隊から帰つて、生活的内容的自信が定まらず、情性的な空虚や、兵隊生活で更に育てられた他力主義——一種の自信と奇妙な形でまざりあつた他力主義、成り行き主義、イージー・ゴーイング、精神の不安定と云ふ状態に於て、自分に対しても留守宅に対しても「特殊」の親切さを示すことによつて、自分に対して「特殊」の存在になつてゐたA君に、まるで思ひもかけない抜き打ち的な失^失□(？)をくはされ、元の職場では自分の古顔であることによつて保つて来てゐた優位が、留守中に谷川君にとられ、すべてに於てなげなしの自信をすっかり失つた、さう云ふ時に自分が失つた当のA君から、「特殊」の親切の延長のやうに、結婚の話を世話されすめられたのです。A君の外形の猛烈さ(内容は一向平凡な保守的な、白田君などよりはるかに卑俗な小人だが)に嗜虐的牽引を感じつつあつた彼が、この数ヶ月のA君の「親切さ」と今度の思ひがけない結婚とによつて、A君にすっかりイニシアティブをとられつくした状態で、いはばA君の「魔力」の圈内で、当のA君から結婚の話をもつて来られた、かう云へば彼のあいまいな、ふんぎりのつかない態度も理解出来るのではないかしら。だからこそ彼は、自分の気持を説明することも出来ない、自分を理論化するどころか、自分でも否定したい方向へふらふらと、まるで何かの魔力にかかつてやうに衝動的に行かうとしてゐる。彼自身、半ばやけのやうに、あらゆる彼の不安や不満や不快の歪められた表出のやうに。こんな風に僕は今日考へました。これが、こんな風ないはば心理憶測(分析ぢやない)が、あたつてゐるかどうか、彼によくきいて、それが当つてゐれば、彼と一緒にその不愉快なコンプレックスを解くことを考へねばならない。もう遅いかも知れないが、そして彼のやうな人格に、もうまじめな関心を持ちつづけられないと云ふ感じもありながら、今日こんな風に彼の気持のもつれを考へてみれば、やはり可哀さうで、もう一ぺん何とかしてやりたいと思ふのです。それにしてもAと云ふ女性はけしからん。彼女の軽薄なまじめなやりかたが、彼女としては無理ないにしても、腹立たしいことに思ひます。こんな風に、人は他の人の生涯を無責任に、往々善意を以て、台なしにするものなんです。従つて正しい理論をもち、まじめに生きることは、その人だけの問題なのぢやない。その人がどんなにこつそりと物かげで一人まじめに生きるにしても。

どうも竹中君のことばかり書いて、あなたが興味を以て読んでくれると云つてくれるものの、やつぱりつまらないことに思ひます。けれどのかかつかつた船で、もうしばらく見てゐて下さい。あなたのお弟子の方がその点余程しつかりしてゐる。そのかはり、僕の不肖の「弟子」の方が、複雑なだけに、こちらがいろんな戦術を考へねばならないから、その

点僕自身には有益かもしれない。とにかくいろいろな人間で自分の理論をためしきたへることは必要です。

ルードヴィッヒの「天と地の間」は、アポロニウスの善良さが、丁度「カラマゾフ」のアリョーシヤや「白痴」のムイシュキンを思はせるやうな、非人格的理想型へ固定されたために、形象として魅力のないものになつてゐるが、しかしアポロニウスは、アリョーシヤやムイシュキンと異つて意識的に自己の倫理をもつた生きてゐる市民、セザール・ピロトウの市民であるし、全体のモラルが多少コチ／＼してゐるにしても、とにかくはつきりして健全であるから、市民小説として立派だと思ふ。フリッツ（兄）の廢残して行く過程もよく描けてゐる。ただアポロニウスとクリスチアーネとの道徳性がやや非人格的なまでに誇張されたために、彼等への反感から、フリッツの廢残が同情される怖れもある。しかしルードヴィッヒのモラルは、はつきりとフリッツの廢残を批判し、廢残なるものの自縛自縛的な転落過程を鋭く、相当リアリスティックに追求してゐる。その点、基本的にバルザックに通ずるものがある。ドストエフスキーとはちがふ。ルードヴィッヒは、だが、ヘッベルよりはドラマティックなテンポに於て劣るやうですね。

ヘッベルやルードヴィッヒはたしかにいいけれど、シェクスピアやバルザックに比べると、豊富さと広さがない。ここで「問題劇」と云ふものについて考へてみませう。夫婦間の問題、家庭問題、社会問題、男女問題等を取りあつた所謂問題劇または問題小説と云ふのがある。例へば、ちよつと思ひ出すだけで、ユーリピデス、レッシング、ディドロ、ヘッベル、ルードヴィッヒ、ツルゲーネフ、ヘルツェン、イブセン、オニール等がそれに類する。之等は何れも社会的歴史的現実をリアリスティックにとらへ、鋭い問題提起をやつてゐる点で、最上の芸術家である。ところがアイスキロス、ソフォクレス、ダンテ、シェクスピア、セルバンテス、バルザック、スコット、ゲーテ、ゴッリ、トルストイ、ゴッリキー等と比べると、豊富さと広さが足りない。後者の部類の芸術家に於ては、歴史的問題提起は実に豊かで、肉づけされてゐて、形象に充ちてゐる。前者の部類では、歴史的問題提起がおほむね単一で振幅がせまく、何だかやせた感じがする。一つ一つの作品が一つ乃至二つの問題しか主として含まない。それだけに問題ははつきり提起されるが、どこか貧困な感じがする。強靱で執拗でも、柔軟性や弾力性が乏しい。「問題」と云ふものが裸で出て来る。だから「問題劇」であり、「問題文学」なのでせう。之に対してアイスキロス、ダンテ、シェクスピアの部類は、問題が実に多様に、振幅も大きく、色調も豊かに、生きた現実として、あらゆる聯関性に於て提起される。それだけに、うつかりすると、人はその問題をとらへそこなふ怖れもなきにしもあらずである。従つて之等は「問題劇」でない。リアリズムと云ふものは、「典型的情勢に於ける典型的性格」の把握でなければならぬが、それには広く遅く深いものと、